

浦賀 探訪 2024



2024 年 8 月

旅のチカラ研究所 植木圭二

8 月の暑い日、私が勤めていた会社の OB 会のイベントに参加して、約半日で神奈川県横須賀市の浦賀を巡ってきた。思いがけない感動があったのでここで紹介したい。

■歩こう会

私は大学を卒業して入った会社を定年まで勤め、その後も OB 会に入って時折イベントに参加している。参加者は同じ会社の OB なので大半は若い頃から知っており、学生時代の友人とは違って一緒に働き苦楽を共にした企業戦士だから、戦友と言っても良いのかもしれない。

さて本日も熱中症警戒アラートが発令される猛暑の中、OB 会のサークル「歩こう会」のイベント“浦賀の歴史探訪”が開催される。

午前 11 時、私は集合場所の浦賀駅に降り立つ。すると元気な“戦友たち”は既に勢揃いしている。参加者は私を含め 11 名、それに「NPO 法人よこすかシティガイド協会」のガイド 3 人が加わる。



【浦賀駅前での様子】

■レンガドック

浦賀駅前には大きな屋根の建物がある。これが旧浦賀造船所（通称：浦賀ドック）の機関工場で、それを左に見ながら歩いていくと、船がすっぽり入るように地面を掘ったドックがある。海水を完全に排水できる構造をしているからドライドックとも呼ばれる。

通常は施設内には入れないが、今回はガイド同行なので入ることができる。やはりこのような歴史的建造物の見学にはガイドを頼むと入場でも説明でもメリットは計り知れない。

ガイドの説明では、ドックは長さ 180m、幅 26m、深さ 11m とかなり大きい。大きいだけでなく重厚感たっぷり独特の趣がある。それはドック内側の壁面に 215 万個のレンガが使用されているからで、それゆえ「レンガドック」と呼ばれている。このようなレンガ造りのドックが現存するのは世界的にも珍しいという。

1899 年（明治 32 年）に建造されてから 2003 年まで稼働して、2021 年に横須賀市に無償供与されたので、公開されたのは最近のことになる。



【レンガドック 先方に見える水門を開けると海につながる】

参加者たちはこの重厚なレンガドックに驚き、「おおー！」「すげえー！」などと声をあげている。中には「地元なのに知らなかった」と言っている人もいる。実は私も神奈川県在住だが、その存在さえも知らなかった。

やはり最近公開されるようになったからだろう。それにしても浦賀は黒船や造船というイメージはあったものの意表を突かれる結果になった。

人は予想外のことや偶然出会った事に感動することが多い、そして予想外であればあるほど感動は何倍にも増幅される。逆に期待していたのに、それが裏切られると落胆する。これを私は「偶然と感動、期待と落胆」と呼んでおり、私の持論にしている。

レンガドックは全く予想外だった。だから感動は相当なものになった。



【レンガドックの内部から撮影】

■世界遺産に

このレンガドックはフランスからの技術支援で造られた。それゆえレンガはフランス積みで、群馬県の世界遺産「富岡製糸場」と同じだ。その歴史的価値からすれば世界遺産に登録されていてもいいような気がするが、残念ながら世界遺産になっていない。

それどころかガイドは、「どうやって保存していくか方針も定まっていません」と言っている。放置しておけば朽ち果てていくのは自明の理で、それはあまりにもったいない。

私はガイドに「世界遺産に申請したらどうですか？」と言うと、ガイドは「世界遺産、そんなことができるのですか？」と驚きながらも話しに乗ってきた。

私はもったいぶりながら、「伊豆韮山の反射炉や長崎の軍艦島などの世界遺産『明治日本の産業革命遺産 製鉄・製鋼、造船、石炭産業』はご存じですよ。あの遺産は8県にまたがり23の構成資産がありますが、それらに比べてこのドックは遜色ないですよ」と切り出した。

続けて私は「新規登録は大変ですが、登録の拡張つまり24番目に加えるならばハードルはずっと低くなります。そして世界遺産になれば注目を浴びるだけでなく、保全義務が生じるから最良の状態の後世に残すことができます」と力説する。

ガイドは「面白そうですね、ただ肝心の横須賀市が動いてくれるか・・・」と心配そうな顔をしている。私は「そんな時は政治家の出番ですね。市の観光課と相談して神奈川県初の世界遺産誕生とか言って、地元選出の小泉進次郎を動かして文化庁に口を利いてもらうのがいいですよ」と熱く語る。

その名前を聞いてガイドは驚き、「それは名案ですね、いけそうですね」と半分その気になり始めている。私も地域貢献の手伝いをした気分になり、何となく嬉しくなる。あとは小泉進次郎にかかっている。おっと、それはかなり気が早い。

■中島三郎介

浦賀コミュニティセンター別館（郷土資料館）に案内される。郷土資料よりも暑さを凌げる冷房の効いた部屋が魅力だが、ここで展示されている中島三郎介という人物がなかなか興味深い。

1853年ペリー艦隊が浦賀沖に来た時、中島三郎介は旗艦「サスケハナ」に乗船し交渉役を務めた。その時に船の構造や蒸気機関、大砲などを入念に調べていたから、スパイのようだとアメリカの記録に残っている。そして彼は軍艦建造と艦隊設置を報告書で上役に訴え、その結果日本初の洋式軍艦「鳳凰丸」の建造に至り、1859年浦賀に日本初のドライドックも建造した。それは明治維新前の江戸時代のことで浦賀造船所が産声をあげたばかりだった。

そして40年後に先ほど見てきた立派なレンガドックが造られた。彼の訴えが結実した。

彼を突き動かした源は何だろうか、日本のために相手を知りたい好奇心や冒険心だろう。

冒険心を英語に訳すと **enterprise**、そしてビジネスの世界でエンタープライズは企業を意味するから、企業の本質は冒険心ということになる。

そして彼のとった行動も企業戦士の仕事そのものだった。まず体を張ってライバルを探り、上司に意見具申し、組織を動かし、結果を出した。

■千代ヶ崎砲台跡

路線バスに乗って、小高い山の麓でバスを降りる。炎天下の坂道をヒーヒー言いながら登り、山の頂に到着すると「千代ヶ崎砲台跡」がある。

ガイドの説明では、東京防衛のため1892年（明治25年）に陸軍によって千代ヶ崎砲台が築かれた。そして運良く第二次世界大戦が終わるまで一発の砲弾を発射しなくて済んだという。

ここは東京湾の入口という要衝で、江戸幕府はここに平根山台場、そして千代ヶ崎台場を築いた。台場とは砲台のことだが、明治政府はそれまでの江戸幕府の全てを刷新させたかったようで、この千代ヶ崎砲台が完成した時は、台場という呼称は使わなかった。

ちなみに東京の「お台場」は江戸幕府が築いた台場（砲台）の名残だという。



【上から見た砲台の跡 丸い穴に砲座が置かれ大砲が設置されていた】

さて肝心の砲台跡は、28cm 榴弾砲を発射する大砲を据える砲座が置かれた大きな穴だけが残っている。砲台2基が対をなして、それが3つあって合計6基の砲台が縦一列に並んでいたことになる。それらがレンガ造りの地下道で繋がっている。

地下道は明治時代の面影を残しながらも神秘的で、ミステリーやアクション映画の撮影に使われそうな雰囲気がある。同じレンガ造りでもレンガドックとはまた一味違う趣がある。

もちろん大砲は残っていない。砲弾を運んだレールも残っていない。ガイドの説明では、第二次世界大戦で鉄が不足して全てを持っていかれたからだという。戦争では一発も砲弾を発射しなかったが、思わぬところで戦争に使われることになった。



【レンガ造りの地下道】



【地下道から砲座が置かれた穴を見る】

鉄はなくなってもレンガだけは残っている。それも見事に残っている。

普通の赤茶色のレンガは水を吸ってしまうが、レンガを過度に焼くと黒く変色して水をはじく性質になるという。これを巧み使って、雨水がかかる部分に黒いレンガが多用されている。

レンガドックはフランス積みだったが、ここのレンガはイギリス積みになっている。その理由をガイドは、「当初はフランスから技術指導を受けていましたが、イギリスは指導料も安く、技術的にも優れていたようです。ただしフランス積みは見た目に美しいですね」と説明してくれた。

さすがイギリスは産業革命発祥の国、そしてフランスは芸術文化の国だ。こんなところにもその特徴が出ていることに感心してしまう。



【イギリス積みのレンガ 右の黒いレンガが焼き過ぎレンガ】

イギリスとフランスの目指しているものよくわかるが、当時の明治政府は江戸幕府の全てを否定して白紙にした。そして日本をどんな国にしようとしていたのか。

それは2つのキーワードに示されている。

学校の教科書にも出てくる“富国強兵”と“殖産興業”がそれだろう。国を強くすること、そのために産業を興すこと。内容の是非は別として、明確に方向性が示されており、明日の日本を切り開こうという強い意思がうかがえる。

しかし閉塞感漂う現在の日本では、残念ながらこのような明確な方向性が示されていない。本来は政治家の仕事なのだろうが、政治家はいったい何をしているのか。

世界遺産の口利きを頼むような輩がいるから、本来の仕事ができないのかもしれない。

さて本日は、明治政府が目指した国創りを見てきた。しかし私はその存在さえも知らなかった。知らないものはどうしようもないが、知るためにはどうしたら良いのか。

現代は情報が溢れており、問題はどやうやって自分の欲しい情報を得るかだろう。

すると私の脳裏に中島三郎介が浮かんできた。彼は相手の情報を得るために懐に飛び込んでいった。されば私も飛び込むべきで、その相手とは先人や専門家だろう。

今回のように自分の興味あるイベントに参加し、専門家のガイドが帯同してくれれば情報も得られる。ガイドがいなければレンガドックに入れなかった。

■アルコール会

バスに乗って京急久里浜駅にやって来る。ガイドと別れて、本日の最終目的地は駅前の居酒屋になっている。歩こう会の最後は必ずこの流れになるから、アルコール会とも呼ばれている。

本日は暑い中の散策だったので、まずは冷たい生ビールで乾杯をする。ビールが喉を通過して胃袋に吸い込まれていく。至福の時とはこういうことを言うのだろう。皆の顔は満足感に満ちているのは言うまでもない。これだからアルコール会はやめられないという声も聞こえてくる。

しかしアルコール会、いや歩こう会は、ただ飲むだけではなかった。

それは私の隣に座った参加者から面白い話を聞いたからだ。彼は自称“日食おっかけ”と言っている。日食と言っても JR 系列の日本食堂ではなく、皆既日食を追いかけて旅することだ。

今年も 4 月にメキシコからアメリカの皆既日食を見てきたという。その時の写真を見せてもらったが、見事な皆既日食の写真はとてもアマチュアの撮影とは思えない。聞けばスーツケースなど 3 つのカバンには撮影機材など 50kg を持参して旅をしたという。

ついでに LA で大谷翔平のホームランを見て、ヒューストンやナッシュビルも巡ってきた。全て個人旅行の一人旅だというから驚くべき行動力に脱帽する。

次の皆既日食は 2026 年 8 月アイスランドからスペインということで、彼はそれまでに資金を貯めて準備すると言っている。

私は彼の目的志向の旅行スタイルに感心してしまい、生ビールのジョッキをカチンと合わせて、お互いの旅に乾杯する。

私は彼のことを昔から知っているが、そのような趣味を持っていることは初めて知った。

人は何十年も生きていくと様々な経験を積み、趣味にも目覚める。それを楽しんでいる彼の姿を見て、他人事なのに何故かワクワクしている自分があることに気が付く。

かつての企業戦士、戦友たちは今も進歩している。考えてみれば、同じ会社で働いていたのだから仲間でもありライバルでもあった。そんなライバルから刺激をもらえる機会があることに感謝しないとイケない。

■旅の記録

実施は 2024 年 8 月 3 日（土）の日帰り、その行程を示す。

11 時、浦賀駅に集合して昼食を購入、旧浦賀造船所（浦賀ドック）のレンガドック見学、

12 時 30 分、浦賀コミュニティセンター別館（郷土資料館）見学、バス乗車し燈明堂入口下車

13 時 10 分、千代ヶ崎砲台跡休憩所で昼食、千代ヶ崎砲台跡見学、京急久里浜駅へバスで移動

15 時、駅前の居酒屋で打ち上げ、17 時解散

費用は総合計で約 6 千円、内訳はガイド代 500 円、昼食代約 350 円、打ち上げ費用 3500 円、バス代と現地までの往復電車代が約 1500 円だった。